

狛犬物語

とうどうるびな  
當堂流美菜  
狭山ヶ丘高等学校 二年

小一の夏休みに母の故郷へ二人でお盆の里帰りをしました。  
た。

母の故郷は長野県の佐久市で、生家は千曲川のほとりに連なる一角に建っています。

二階の物干し場から千曲川の流れや、雲の様な煙を付けた浅間山を眺める事が出来ました。

佐久は鯉や鮎で有名ですが、お祭りや、花火大会も盛んな土地柄です。

夜空いっぱい弾け飛んだ大輪の花々が降り注ぎ、千曲大橋に仕掛けたナイヤガラの滝の爽快な初体験の思い出は、高校生になった今も私の心から消える事なく伊佐沼の花火大会を見る度に鮮やかに蘇ってきます。

帰り道で見上げた夜空には、光瞬く大きな星が無数に輝き、一瞬の流れ星が幻想の世界へと誘ってくれるのでした。それは私の地元川越では味わった事の無い夢の一時でした。お墓参りを済ますと、鮎の塩焼きを食べに母と二人で千曲川の河原に向かいました。

跡取りの政伯父さんは投網の名人で、ただ広げるだけでなく大石を避けて色々な形に打つ事が出来ます。

川原に着くと、母の兄弟や妹さん家族ら大勢で盛り上がり

ていました。

「こっちこ、こっちこ。こんとこでくれ」

おばあちゃんが串に刺した大きな塩焼きの鮎を二匹持って来てくれました。

母が一匹、私が一匹、大きく口を開けて、「ガブリ」食らいつくと口の中一杯に、胸の奥までも母の故郷の味が、自然の香りと思いが蘇り幸せが広がってゆくのでした。

楽しい日々は駆け足で過ぎて行き、あつという間に埼玉に戻る日が来てしまいました。

中込駅に向かつて土手を歩いていると、

「クンクン、クンクン」

子犬の鳴き声が聞こえて来ました。

振り向くと小さなダンボール箱に犬の赤ちゃんが二匹、不憫にも捨てられています。

「あつ、子犬だ。こんな所に子犬が捨てられてる」

近づくと【どなたか拾ってください】ダンボール箱にマジックで書いてあります。

「うあー、拾ってくださいって書いてある。拾ってこ、拾ってこつよ。お土産お土産。お父さんも絶対に喜ぶって」

「でも、二匹いるわよ」

「だって一匹だけ残したら可哀相じゃん」

狩猟が趣味の父の影響でルーちゃんも少しだけ猟犬の事を知っていました。

一匹は茶と白、もう一匹は黒と白の斑模様まだらで、毛並みから猟犬のセッターの様でした。

「それもそうね」

母はあっさりと言ったのか、私のTシャツを二枚丸めて入れると上手に蓋をしてくれました。

大事に抱えると列車の中でも膝の上に置いて放しませんでした。大宮駅につくまではとっても心配でしたが泣く事も無く到着でき、「ほっと」胸を撫でおろしました。

父は一目見るなり、

「おう、凄いいじゃん。最高の土産だ。ありがと、ありがと」崩した笑顔が本当に嬉しそうでした。

「茶と黒とで少し毛並みが違う様だから、きっとセッターとポインターの雑種だな」

「じゃあ駄目なの。役に立たないかなあ」

「いやいや、一代雑種と言って最高の犬が出る事もあるから、楽しみじゃないかな」

一匹ずつ持ち上げるとお腹を見ながら、

「茶色の方はメスで、黒い方がオスだな」

「そうなんだ。それで猟にはオスとメスと、どっちが良いのかなあ」

「うーん。まあ、その人の好みにも依るけどメスは搜索がきめ細かく、オスは豪快でスタミナがあるのが特徴だけど個体差の方が大きいから。あんまり関係ないと思うよ。」

大体の人は初めに出会った良犬がオスかメスかで判断していると思うから、きっと、その時の印象が強くなるんだろうね」

「ふうーん、そうなんだ。で、お父さんはどっちがよいの」「うちは猟芸じゃなくて、手間の掛からないオスばかりだね。」

まあ、これはかあさんの好みだけだね」

「そりゃそうよ。結局は私が面倒見るんだから」

母が話に入って来ました。

牛乳は子犬には良くないと聞いた事があったので、粉ミルクと哺乳瓶を買って来ました。

母に教わりながら一匹ずつ膝に抱えて飲ませると、お腹が空いていたのか、

「クチュ、クチュ」夢中で飲んでいきます。

ちょこまかと歩き回れる様になったので、東松山にある百穴射撃場に銃声を聞かせに連れて行きました。

大きくなってから銃声を聞かせると、「ガンシャイ」と言っ  
て銃声を聞く度に怖がって逃げ帰る犬になりやすいからで  
す。

遺伝的な性格もありますが、大抵は子犬の時に銃声を聞  
かせる事で解決できると聞いていました。不幸にしてガン  
シャイになった場合、全治は難しく多少の後遺症が残って  
しまうそうです。

初めは遠くから抱いて聞かせました。

二回目はお菓子をやったり、歩かせながら聞かせると、  
三回目には近くの連発音にも平気で二匹ではしゃぎ回って  
いました。

早いもので二ヶ月が過ぎ猟期が近づいた頃に父の猟友か  
ら一匹譲ってほしいとの要請がありました。

「ルーちゃん、二匹飼うのは難しいから一匹あげたいん  
だけど、ルーちゃんの好きな方を残すから好きに決めて良  
いからね」

父は優しく言ってくれましたが、いざ選ぶとなると迷っ  
てしまいます。

茶の方が毛も長く、鼻も良さそうできっと純血に近いの  
かも知れません。でもメスです。

黒い方は毛も少し短く、足下に絡み付いてばかりの甘え  
ん坊で何かを探す様子は見せません。迷った末に黒い方を  
選びました。

猟犬としての才能は茶色のメスに軍配があがる様に思  
いました。でもルーちゃんは黒毛のオスを選んだのです。

貰われて行った先で役に立てずに悲しい目に合ったらと  
考えた時に足に絡み付いて来たのです。母の事も考え、父  
には泣いて貰う事にしました。

「黒にしよう」と

「おう、そうか。決まりだ。じゃあ、茶の方をあげるからね」  
後に猟友にあげた茶色のメスは仲間内でも評判の名犬に  
育ちました。

二回程子供を取ったそうですが、残念ながら親の様な名  
犬は一頭も出なかったそうです。

我が家の愛犬は黒ちゃんに決めると、名前は【ルガンド】  
にしました。

父に、「名前はルガンドにしたよ」と夕飯の時に報告すると、  
「なに、ブランド？ 雑種のブランドとは面白い。こりゃ

受けるね」と、笑いしました。

「ブランドじゃ無くてルガンド。ルーちゃんの好きなお菓子の名前から取ったんだから。」

「ちゃんと覚えてよ。ルガンド」

父と母は顔を見合わせて笑っています。

「こりゃ甘ちゃんの迷犬になるなきつと」

母も頷きながら、

「二人前、いや一犬前になれると良いわね」

「アッハッハ」父も楽しそうに笑うと、私の頭を撫でてくれました。

四ヶ月頃から少しずつ訓練を始めました。

大用のササミジャーキーを使って待てとお座り、散歩をしながら後も教えました。

次は中にササミジャーキーを入れて丸めた軍手を投げ、くわえた時に持って来い、持って来いと呼び寄せて軍手を受け取ったら、「良い子、良い子」頭を撫でながらジャーキーを与えます。

初めは網を付けて二、三メートル位から始めましたが、直ぐに覚えると後は何メートル投げてても、草むらに投げてても探して拾って来る様になりました。

教え込んだのは、待てと後、お座りと、持って来いの四つだけです。

猟犬は「四つだけで十分、後は必要ない」これが父の持論でした。

川原や草原に連れだすと大はしゃぎです。

何にでも興味を示し嗅ぎ回る様になりました。鳥や兎ならともかく、野ネズミ、ヘビやカメ、ある時など、捨てられたネコの赤ちゃんをくわえて来た事もありました。

白いハツカネズミ程の大きさの野ネズミの時には正体を見るまでに時間がかかりました。

ポイント（鳥を這わせない様に押さえ込んで犬も止まっている姿の事）しても何にもできません。

カラポン（鳥はいないのに強い残臭にポイントしてしまう事）のくせがあるのかと何度か注意深く観察しているうちに、とうとうカラポンさせる犯人の正体を発見しました。丸く小さなヒバリの巢の様な巣から逃げて行く二匹の野ネズミだったので。

飯能の山に連れて行った時の事です。山と言っても高台の畑で、てっぺんまで畑が続いています。見通しの良い所なのにルガンドが消えてしまいました。

父と二人で「ルガン、ルガン」大声で呼ぶと、「ワン、ワン、ワンワン」鳴き声が聞こえました。声を頼りに近づくと深さ二メートルぐらゐの穴に落ち込んでいました。

父の話では野菜用の穴蔵ですが、降りても穴から出られそうもありません。

二百メートル程離れた農家からハシゴを借りて戻ると、やっと助け出す事が出来ました。

穴から出ると、鳴きながら私の足に前足でしがみついて来ました。可愛くなって車まで抱っこしてあげたのですが、これが間違いの元でした。疲れると私の足にしがみついて抱っこをせがむ癖がついてしまい苦労させられたのです。

二度目の猟期は一才五ヶ月、一人前の猟犬の年ですがまだまだ半人前でした。

キジやコジウケイ、ヤマシギなどはそこそこやってくれるのですが、犬のくせに泳げない事が分かったのです。

夏に嵐山の川遊びに連れて行ったのですが足の着く所で飛び回っていて、泳がせる事はしませんでした。犬は泳げるのが当たり前だと思っていたからです。

それに私もまだあまり泳げませんでした。

ボールを投げると喜んで取って来ますが足の着く所はか

りでしたので、気が付きませんでした。

猟期に入って川田谷の沼でカルガモの群れを見つけた時の事です。

私とルガンは大回りをして、銃を構えて待っている方へ飛び出す様に大声をあげて追い立てると、カルガモの群れは計画どおりに父の頭上に被って行きました。

「バン、バン」銃声が二発鳴り響くと、

「おーい。落としましたぞっ」

父が大声で知らせてくれました。

近付くと岸边に一羽、岸から七メートル程の所に一羽が白い腹を出して浮かんでいます。

すぐに岸边のカモを回収して来ました。

「よし、よし」頭を撫でて受け取ると、

「持って来い」

指をさすと、さっとカモに向って沼に飛び込んで行きましたが足が着かなくなると、慌てて戻って来てしまいました。

「ルガン、持って来い」

もう一度命令すると、今度は二メートル程泳ぎましたがやっぱり直ぐに戻って来てしまいました。

「バッチャン、バッチャン」前足を水の上まで出して水飛

沫をあげています。犬かきではなく、それは泳げない人が「バチャ、バチャ」暴れもがくのそそくくりでした。

父は「うーん。ちょっと無理だな」

そう言っただけの銃を袋に入れ私に預けると沼の中に入っ  
て行きました。

ルガンドも後を付いて行きます。足の着かなくなつた所  
からは片手で抱える様に支えようと、少しずつ進んで行きます。

「おう、思ったより泥深く無いな。これなら歩けるわ」

水深は浅く腰の上ぐらいです。カモをルガンドにくわえ  
させると、抱く様にして戻って来ました。

車に戻ると、「寒い、寒い」着替えながら寒いを連発して  
いる唇が小刻みに震えていました。

私はルガンドの頭を撫でながら、

「よし、よし。偉かったね、偉かったね」

ほめてあげるとササミジャーキーを与えました。帰りの  
車中で、

「夏になったら泳ぎを教えよう。泳げない犬なんて聞いた  
事ないよなあ」

「ウフフッ。ルガンドったら溺れちゃうかと思つたよなね。

でも最後まで付いて行つたから立派だと思つよ。」

夏になったら私がちゃんと泳ぎを教えるから。大丈夫  
任せといて」

この事があってからルガンドに少しずつ変化が見られる  
様になりました。水が少しだけある様な浅い小川や沼のア  
シの中の臭いを時々嗅いで何かを探している様子です。

隠れて居るとしたらタシギやフイナ、それにコガモかも  
知れません。大バンやカルガモも時には隠れていますが大  
や人が近付くと早くに水の上に姿を表し、泳いだり水面を  
足で掻く様にして飛んで逃げるので容易に確認する事が出  
来ません。

普段の日は父は仕事で私は学校なので私と父が出猟する  
のはいつも日曜日です。

日曜日は出猟者が多く早朝は何かと危険なので一段落し  
た九時ぐらいに猟場に着く様に家を出ます。

山猟と違って平場のキジなどは、午前と午後の二回餌場  
に出て来ます。

十一時ぐらいから人家近くの休み場に帰って、午後は一  
時過ぎないと出て来ませんが、雨降り前の午後などは平気  
で姿を表します。

面白いもので朝は居なかつた場所でも、午後には出合つ

事が度々あります。

その点水際の鳥は追われない限り近くに付いている事が多いようです。

車でキジ場と水場をぐるぐる一日二、三回程同じ場所を回って猟をします。

この日も、ルガンドがいつもの様に小川のアシを嗅ぎながら行ったり来たりしています。

その内水に入ると水の中を小川に沿って臭いを取りながら歩き出しました。

四、五メートルでアシの切れ間に差し掛かると、そこから黒いハトぐらいの鳥が水面を駆け回る様に飛び出しました。

バンです。

瞬時に銃声が轟くとバンが転がりました。

バンは水面の上を走る様に逃げ、飛びあがる事は無いので出せば打ちやすい鳥です。

ルガンドが喜々として回収して来ました。

「ワン、ワン、水の中から出したんだぞ」

私にバンを渡すと自慢そうに飛び回りながら、ジャーキーをせがみました。

バンは足が長く水の中を歩き回る鳥なのでクイナに似て

います。

カモの様な水掻きや大バンの様な特異な水掻きもありません。

父が食わせてやったらと言ったのですが、「食べるかなあ」少し不安になりました。

キジやキジバトの内臓は喜んで食べますが、カモの内臓は臭いを嗅ぐだけで食べません。水鳥類は苦手だと思っていたからです。

「ルガン、ごほうびよ。美味しいからね」

手渡してやるとガリガリ食い出しました。

「えっ、どうしちゃったの」

びっくりした事に、足から頭まで、それに大きな手羽の羽根まで全部食べてしまいました。小さな羽根一つ残さずに、本当にきれいに全部食べてしまったのです。

狩猟場で旨い鳥の筆頭には全身に脂の乗ったウズラやタシギにバンをあげる人が多いのですが、埼玉県では猟期にバンを見た事のある人は少ないのではないのでしょうか。

よっぽど旨くて味を占めたのでしょうか、貴重なバンを得意にする猟犬に育って行くと、二、三メートルは足をバタつかせながら泳いで回収するまでに成長してくれました。



入間川でカモを撃ち落とした時の事です。

入間川は深いので犬の足は着きません。岸からわずかに十五、六メートルの所を流れています。

「持って来い」指を差すと、「バタ、バタ」水の上まで前足をあげ、水飛沫をあげながら二、三メートルは行きますが、直ぐに戻って来てしまいます。

カモは流れに乗って少しずつ岸の方に寄っては来ていますが、直ぐ下流に五、六人の釣り人が竿を出しています。

四度目の挑戦ではカモは十メートル程に近づいていますが、釣り人の前に差し掛かって仕舞いました。

「おっ、どうした、どうした。泳いでるのか溺れてるのか。ガンバレ、ガンバレ」

釣り竿をあげると、バッチャン、バッチャン泳ぐルガンドを応援してくれました。

「ルガン、持って来い、持って来い」  
私も大声をあげて激を飛ばしました。

みんなも釣り竿をあげて応援してくれました。釣り人が並んでいて岸に戻りづらくなったのか、近付いたカモに闘志をかきたてられたのか分りませんが、とうとうカモまで辿り着き口にくわえると釣り人が一斉に拍手をしてくれま

した。

大きなカルガモをくわえたので前足をあげる事が出来ません。不思議なもので今度はスイ、スイと普通の犬かきになると一直線に私の所に戻ってくれました。

私が両手でカルガモを受け取るとルガンドは、「ブル、ブル」大きく体を振ってたくさんの水飛沫を飛ばしました。

「おじょうちゃん、良かったね。何か泳ぎも覚えたみたいだね。アツハツハツ」

釣りの邪魔をしたのに、またみんなで拍手をしてくれました。

頑張り抜いたルガンドと釣り人の温かい思い遣りに、胸と目頭が熱くなると直ぐにはさげた頭をあげる事が出来ませんでした。

一人前の猟犬に育ったルガンドは私の自慢です。だって私が拾って育てて猟を教えたんですもん。

私の自慢はもう一つ、母の故郷へ山女釣りに行った時の事です。

父は十五から二十センチ前後の山女を十匹以上釣りあげました。私は三匹でしたがその内の一匹が三十センチ近くあったのです。

それ以来、私は釣りの話が出る度に、

「私ね、お父さんよりうんと大きい山女を釣って勝ったんだから」

鼻たかだかで自慢しています。

父は一度だけ「釣りが巧いかどうかは型ではなく数で決めるんだから」と言った事がありました。いかにも負け犬の遠吠えに聞こえてます。鼻が高くなりました。

それから何年かはいつもルガンドと一緒に過ごしました。

猟や釣り、嵐山の川遊びや、鹿止めの虹マス釣りにバーベキューなどいつも一緒に楽しんできました。

でも何回かは大変な事にも出合いました。

初めてダニにたかられた時の事です。

東松山の百穴射撃場に付いて行くと、父はクレー射撃、私とルガンドは近くの川へ水遊びに出掛けました。

少し下流は土手から川まで石段が作ってあるのですが、水遊びの大人や子供達で賑わっています。上流に向って降り口を探したのですが、高いコンクリートの壁が続いていて降りられる場所がありません。

諦めて右側の山に入り遊んで来ました。

何日かたってルガンドの毛に何箇所か穴があいているの

に気付き、かき分けると豆粒程に膨れた大きなダニが食い付いています。

指先で摘み取ると、膨れた青黒いお尻は取れて来たのですが、食い込んだ頭は皮膚の中に残って取れて来ません。

取った後に赤チンを塗ってやりました。

殺虫剤を吹き付けたりしましたが、何日かすると又血を吸った大きい奴が出て来ます。

三回程くり返して全部取り除くまでに一ヶ月以上も掛かりました。

皮膚病にかかった時も苦労しました。

下半身の右側の毛が抜けて真赤な皮膚から血が滲みかさぶたが破れて、とても酷い状態になって仕舞いました。

市販の薬をいくら塗っても一向に効きません。弱っていると、母が、

「人間の皮膚病には草津の硫黄温泉が良いのよね、でも犬じゃあ入れないわね」

眩く様に教えてくれました。

父が硫黄の入った人間の塗り薬【ムトウハップウ】を購入して来ると、薄めてタライのお風呂に入れたり患部に塗ってやると、どんぴしゃ、どんぴしゃって全快しました。

後年、犬や動物にこの皮膚病が流行した時も、この薬で何頭もの犬を治して喜ばれました。

今でも入間川や荒川の河川敷で全身毛が抜けた野生のタヌキやイノシシに出会う事がありますが、その姿は何とも哀れで心が痛みます。

ある時、前足のくるぶしの上にトゲを刺した事がありました。軽い気持ちで赤チンを塗って終わりにした所、トゲは六センチ程膝に向った所から抜け出て来ました。

トゲが通った部分が膿んで破裂すると骨まで見える重症になっていました。

赤チンでは手に負えず、この時は人間用のクロロマイシンの錠剤を飲ませて、傷口にはクロマイの軟膏を塗って完治させる事が出来ましたが、私の心も深く痛みました。

小学生最後の年に六回目の猟期を向えました。

年も変わり終猟に近付いた日曜日、今猟期最後の出猟は鎌北湖のヤマドリに挑戦しました。

ヤマドリは簡単に出会える鳥ではありません。出会えれば発砲出来なくとも不思議に満足感が残る程魅力のある猟鳥です。

長い尾羽根をたずさえて猛スピードで沢くだりする姿は

思わず見惚れてしまいます。

この日は二沢目の入口からノーポイントで飛び出しました。

「タン、タン」スナップ射撃の二発目が決まり落下しましたが半矢です。直ぐに沢の斜面を走り出しました。

ルガンダム直ぐに追い駆けて行きます。

追いつくかと思った瞬間、立ち木に頭をぶつけると倒れて仕舞いました。

一瞬脳しんとうを起こした様でしたが、直ぐに立ちあがるとふらふらしながら探し始めました。

幸いな事にヤマドリは近くの草叢に突っ込んで隠れていましたが【頭隠して尻隠さず】長い尾羽根が見えていました。ルガンダムが半矢のヤマドリをばたつかせながらくわえて来ると、ほっと一息付く事が出来ました。

初猟の猟果も嬉しいものですが、終猟の猟果程嬉しくほっとする事はありません。

キジバト一羽でも十分に満たされます。

万が一不猟だと次の猟期までの九ヶ月間ずっと寂しい思いを引きずるからです。

豊猟の年でも終猟の不猟の寂しさはいつまでも尾を引く

から不思議です。

猟期が終わり温かい三月の初めにルガンドが寝たまま起きて来ません。

今日で三日目です。

私も父もさすがにただ事では無いと心配になりました。

「ねえ、ねえ。あの時木に頭をぶつけたせいかな」

「いや、あれが原因ならもっと早くに症状が出てなくっちゃおかしいと思うよ」

父も原因を掴みかねています。

「もしかしたら寿命かなあ」

「えっ、だってまだ数えで七才だよ。いくらなんでも早すぎない」

「うーん、猟犬は運動が激しいから六、七才で亡くなるのは珍しい事ではないよ」

「そうかなあ」

「人間で言ううと五十代だな。年ではないけど寄生虫はいないし、ヒトリヤの薬も飲ませているし、過労じゃないかなあ」  
鼻が乾いているので何処か具合が悪い事は間違いありません。

父は何頭もの犬の最後を見届けて来ているのできつと聞

違いありません。

動物は自分の死期を悟ると言いますが、ルガンドも感じているのでしょうか。

良くは分かりませんが、静かに目を閉じて動かないルガンドを見てみると、ふとそんな思いが頭を過ぎり不安が走りました。

体を撫でながら千曲川の土手で出会った時からの事を色々と思い起していると、

「あつ、そうだ水を飲ませてやろっ」

もちろん水は置いてありますが飲んではいません。お別かれの水のつもりでした。

新しい水を汲んで来ると指先に付けて口の回りを濡らしてやりました。

目を開けると少し口を開けたので、両手の平で水をすくと歯の間から少しずつ流し込む様にしてやりました。すると舌を出して少しなめたのです。

「あつ、お父さん、お父さん。ルガンが水をなめたよ」

私が大声を出すと、父が跳んで来ました。

「どっした。水飲んだのか」

「うん、少しだけ舌を出してなめたよ」

「そうか、少しは望みがあるかもな。今、ブドウ糖の水を作つて来るからな」

父が作ってくれたブドウ糖水を指でなめさせると、父に口を開けて貰いむせない様に少しずつ飲ませてあげました。

次の日には自分でも飲める様になると、少しだけですがシャブシャブの豚肉を食べてくれる様になりました。

三日目には自分で立ちあがると、用を足すまでに回復してくれました。

一週間もするとブドウ糖の力でしょうか家の周りを散歩するまでに回復してくれました。

元気に尾を振るルガンドを見ながら、

「良かったね。もう、すっかり元気が戻ったみたいよ」

「そうだね。でも猫はもう無理だろう。少しのんびりさせてやろっ」

父の言葉に、「どうかなあ」私には元に戻った様に見えませんが、経験豊富な父の目には私と違って見えたのかも知れません。

暖かい春の日差しを浴びて桜の花が私の新しい門出を祝って咲き誇っています。

桜の花は短い命ですが、散った後も心の中から消える事

はありません。

中学校の入学式を控えて、毎日浮き浮きしていました。きつとそのせいでルガンドの変化に気が付かなかったのかも知れません。

ちょこちょこうたた転寝をするのは春の陽気のせいだとばかり思っていました。

今日は中学校の入学式です。譲り受けたお下がりのセーラー服を着込むと門を出ました。

「ワン、ワン。ワン、ワン」

滅多に吠える事の無いルガンドが吠えています。

「あっ、ごめん、ごめん」

慌てて家に戻ると、扉を開け頭を撫でるとお腹をさすってあげました。

「ルガンちゃんにも分かるんだ。ありがと、ルーちゃん今日からピカピカの中学生だからね。帰って来たら散歩に行こうね」

「ワン、ワン。ワン、ワン。クウーン」

「じゃあね。行って来ませー」

いつもは尾を振るだけのルガンドが鳴いて送ってくれました。

「ルガンったら本当に可愛んだから」

ルーちゃんは今日は何か良い事がある様な気がして心が弾んで来るのでした。

クラスが決まり、担任の先生も決まると、新しい顔の友人との交流も始まりました。

期待で胸が一杯に膨らんだ思いを抱えて帰途につきました。

普段着に着替えると真っ先にルガンの所に跳んで行きました。

「ルガン、帰ったよ」

犬小屋に行くくとルガンドは横になっています。

「ルガン、お待たせ。散歩に行こう」

戸を開けて近付くと前足に顔を乗せて眠っています。

何か楽しい夢でも見ているのでしょいか、そんな穏やかな感じの顔に一瞬起こしちゃ可哀相かなと思いましたが、

「まったく、いくら春でも寝過ぎでしょ。」

「さあ、さあ、散歩に行くからね」

声を掛けながら頭を撫でると、少し冷たく感じました。もう一度頭を撫でながら異変に気が付くと頭の中で何度も

何度も打ち消しました。

「ルガン、ルガン。起きて、起きてよ。起きなきゃ駄目」

ルガンドの体を揺すりながら胸が締め付けられると涙が溢れ出てきました。

いくら体を揺すってもルガンドが目覚める事は一度とありませんでした。

「今朝、学校に行く時に何度も鳴いて送ってくれたのは、中学生になったお祝いだけでなくて……、さよならも言うてくれてたんだね……。」

「ありがとう。そしてごめんね、気が付かなくて、本当にごめん。」

今度生まれくる時は絶対に人間に生まれて来てね。そしてまた家族になろう。

祈っているからね……。ありがとうルガン大好きだからね、いっぱい愛しているよ……。」

心の底からも、両まぶたの裏からも。

後から後から流れ出て来るしずくを、押える事が出来ませんでした……。